

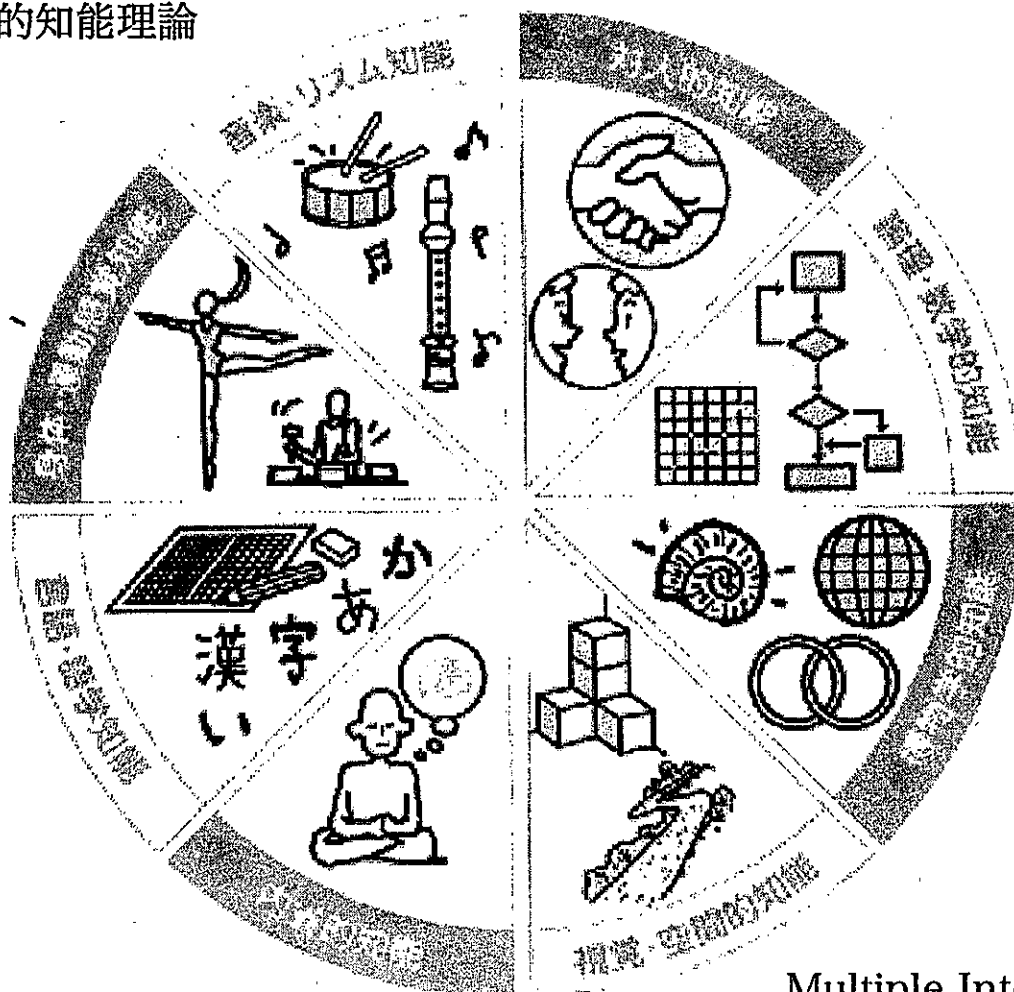
図18 非認知能力とは何か

| 学術的な呼称 | 一般的な呼称 |
|---------------------------------------|--------------------------|
| 自己認識 (Self-perceptions) | 自分に対する自信がある、やり抜く力がある |
| 意欲 (Motivation) | やる気がある、意欲的である |
| 忍耐力 (Perseverance) | 忍耐強い、粘り強い、根気がある、気概がある |
| 自制心 (Self-control) | 意志力が強い、精神力が強い、自制心がある |
| メタ認知ストラテジー (Metacognitive strategies) | 理解度を把握する、自分の状況を把握する |
| 社会的適性 (Social competencies) | リーダーシップがある、社会性がある |
| 回復力と対処能力 (Resilience and coping) | すぐに立ち戻る、うまく対応する |
| 創造性 (Creativity) | 創造性に富む、工夫する |
| 性格的な特性 (Big 5) | 神経質、外交的、好奇心が強い、協調性がある、誠実 |

出所：Gutman, L. M., & Schoon, L (2013). The impact of non-cognitive skills on outcomes for young people. Education Endowment Foundation をもとに筆者作成

出典：「学力」の経済学 中室牧子著

多元的知能理論



Multiple Intelligences

教師がすべきは生徒のモチベーションを高めること

アンジェラ・リー・ダックワース氏（以下アンジェラ）：27歳のとき、私は高度な技能が要求される経営コンサルティングの仕事を辞め、更に高度な技能が要求される仕事に転職しました……教師になりました。

ニューヨーク市内の公立学校で、中学1年生の子供たちに数学を教えていました。多くの先生方がやっているように、質問や問題を出して解かせたり、テストをしたり、宿題を出して、子供たちが提出してくれた宿題を採点し、評価をつけていました。

すると驚いたことに、最も成績の良い生徒と最下位の生徒との違いは、IQだけでは説明がつかなかったのです。IQの数値は特別優れているわけではないにも関わらず、テストで上位の成績をとる子もいました。

逆にIQの数値は高いのに、テストでは点数が取れない子もいました。その経験から、私は次のように考えるようになりました。中学1年生の数学で子供たちが学ばなければならないことは、一割合や小数など、もちろんそれなりに難しいけれども一努力すれば理解できる範囲のもの、決して不可能なものではないはず。

それで私は確信しました。IQの数値に関係なく、生徒たちは誰でも皆、時間をかけて勉強に取り組めさえすれば、必ず出来るようになるということ。

数年の教員生活を通して、私は1つの結論を見い出しました。教育に必要なことは、心理学的な見地から、もっと子供たちを理解してあげること、もっと子供たちがモチベーションを高めながら学べる環境をつくってあげることだ、と。

成功の秘訣を探る4つの調査

教育現場において、IQは知的能力を計る最適な方法の1つとして知られています。しかし、学校や人生で成功するための秘訣は、IQテストでは測れないものの中にこそあるのではないのでしょうか？

それをきっかけに、私は教育現場を離れ、大学院で心理学を学び、心理学者になりました。私の心理学者としての研究は、様々な環境においてものすごく難しい課題に挑戦する大人や子供たちを研究することから始まりました。

複数の研究を行いました。どの研究においても共通テーマとして掲げていたこと、それは「1番の成功者は誰か？そしてそれはなぜか？」ということでした。

私たちは4つの現地調査を行いました。まず1つ目に、私たちの研究チームは「ウェスト・ポイント・ミリタリー・アカデミー（アメリカ、ウェスト・ポイントにある軍事教育学校）」に行き、

グリットは科学においてもほとんど知られていないのが現状です。毎日のように、私は保護者の方々や先生方から質問を受けます。

「どうしたら子供たちにグリットを持たせることができるのか？」

「自発的に熱心に物事に取り組む子供に育てるには、どうしたらいいのか？」

「どうすれば、子供たちのモチベーションを長期的に持続させることができるのか？」

正直なところ、その答えは私にも分かりません。(会場笑)

ですが、私が自信を持って言えることは、生まれ持った才能や知能はグリットに関係しない、ということです。生まれつき素晴らしい才能や知能を持っているにも関わらず、十分な結果が得られなかった人はたくさんいます。

それはただ単に、その才能・知能を伸ばすための長期的な、継続的な努力が足りなかっただけなのです。これは私たちの研究結果において、とても明確に証明されています。実際、私たちの研究結果によれば、グリットは生まれ持った才能・知能とは基本的に関連性がなく、先天的な才能・知能を測る方法としてグリットを用いることはできません。

まずは失敗を恐れず挑戦する

ではここで、グリットを持った子供を育てるために1番役立つと思われる、「グロースマインド・セット」という考え方を引用します。

「グロースマインド・セット」というのは、スタンフォード大学のキャロル・ドゥエック博士が発展させた考えで、内容としては「知能は生まれつき固定されたものではなく、後天性のもの、努力を重ねることによって変えることができるものである」という考え方です。

ドゥエック博士の研究では、子供たちに脳と知能の発達について予め学習させ、知能は生まれつきのものでなく、挑戦し続けること、努力することによっていくらかでも伸ばすことが可能であると教えた後に難しい問題を解かせると、子供たちは難しい問題に対しても失敗を恐れず、自ら進んで挑戦しようとするのが分かりました。

なぜなら、彼らは失敗することについて、永遠に続く致命的なものではないと知っているからです。ですからこの「グロースマインド・セット」という考え方は、どうすればグリットを育てられるかを説明する上で、とても素晴らしい考え方です。

でもこれだけでは不十分ですね。ここからもう少し発展させなければなりません。ですが私が現段階で皆さんにお伝えできることはここまでです。直感を信じて、自分の能力を試してみましょう。何をどうすれば成功できるのかを知るために、失敗を恐れずに積極的に挑戦し、失敗を重ねてみなければなりません。

たくさん失敗して、失敗から学んだことを次に生かして、何度でもやり直しましょう。言い換えれば、まずは私たち大人が見本となり、グリットを持った人間にならなければなりません。そうすれば私たちの子供たちも、よりグリットを持った人間に育つのではないのでしょうか。